八〇年の一九パーセントから二七パーセントに増え、昨年上半期の売上げも六五パーセント（一昨年は一二六パーセント）上昇した。逆に西独、英国、フランス、イタリアからの輸入は減少した。

カナディアン・ブラスなど日本各地で公演予定

カナダ政府の文化使節としてヨーロッパ各地、ソ連、中国で演奏し、巧みな演奏とすぐれたユーモア感覚で音楽ファンを魅了してきた「カナディアン・ブラス」が、四月二十日から一か月余り、日本各地で公演する。来日は八〇年に次いで二度目。

公演プログラムは、〈A〉ムーレ「ロンド」、ボイス「組曲」、バッハ「ブランデンブルク組曲」、ドビュッシー「組曲」、ブッチーニ「蝶々夫人」、〈B〉シャイト「戦いのガイヤルド」、ヘンデル「組曲〝水の上の音楽〟より」、ガブリエリ「五声部のカンツォーナ第一番」、ビゼー「歌劇〝カルメン〟より」、スタイガース「ベネチアの謝肉祭」、リムスキー・コルサコフ「くまばちは飛ぶ」など。

公演予定は、四月二十日習志野文化ホール、二十一日千葉県文化会館、二十二日浜松市民会館、二十八日新潟県民会館、五月七日群馬県・太田市民会館、九日神戸文化大ホール、十日京都会館第一ホール、十一日大阪厚生年金会館、十二日神奈川県立音楽堂、十三日厚木市文化会館、十六日愛知厚生年金会館、二十七日東京簡易保健ホールほか。問い合わせ先・民音広報室、電話〇三―三七一―五一〇一。

カナダからはまた、アルバータ大学弦楽四重奏団が帯広（五月十一日）、釧路（十二日）、札幌（十三日）、宇都宮（十五日）、横浜（十七日）、東京（十八日）、武蔵野（十九日）に公演旅行をするほか、ソプラノ歌手のローズマリー・ランドリーが四月末から五月初めにかけて、東京・駒場、青森、愛媛県東予市、仙台市などでリサイタルを開くことになっている。

さらに、ピアニストのアンドレ・ラプランテが、東京・昭和女子大（五月十二日）、広島・エリザベート音楽大学（十三日）、大阪・森之宮ピロティホール（十四日）、沼津市公会堂（十五日）でリサイタルを開く。

宇宙計画予算を大幅増額四年間で総額四・七億ドルに

カナダ政府は、八〇年代の経済振興戦略の一環として通信衛星の打ち上げなど宇宙計画に力を入れることを決め、このほど一九八一―八四年度の宇宙関係予算を三八パーセント増額した。これで四年間の総額は四億七千五百八十万ドルとなる。

支出項目で大きいのは、例えば欧州宇宙機関（ESA）が計画している大型商業衛星計画（LSAT）への参加。カナダ政府は八四年度までに六千八百三十万ドルの支出を計上している。LSAT計画は、さまざまな通信機器やその他の荷物を運ぶことのできる大型衛星を開発、製造、打ち上げようというもので、欧州宇宙機関がブリティッシュ・エアロスペース社を主契約者として実施している。米国のスペースシャトル用に遠隔操作システム〝宇宙船の腕〟を開発、製作したトロントのスパー・エアロスペース社が、衛星の太陽熱集光板（太陽電池羽根）を製作することになっている。

宇宙開発予算には、移動中の船舶や飛行機、自動車とただちに連絡できる移動衛星（MSAT）の開発、気象観測のほか北極の石油・鉱物資源を探るリモート・センシング（遠隔探査）に威力を発揮するものと見られるレーダー衛星の開発も、含まれている。

メートル法、小売店でも全国的に順次実施

カナダでは、肉や野菜の値段が一月四日から、全国二十一都市でいっせいにキログラム単位で表示されるようになった。

カナダ政府は従来より、ヤードポンド法からメートル法への転換を進めていたが、今回はこれを主要都市の食料品店に徹底普及させようというもの。国内全域に広げるには、来年末までかかるという。今回の措置によって、メートル法転換計画はいよいよ最終段階に入った。

小売店はしばらくの間、旧表示も併記してよいことになっているが、メートル法表記に従わなかった場合、初回違反が罰金千ドル、二回目違反が罰金二千五百ドルと懲役など、きびしい処罰が待っている。

故近藤晋一日加協会会長を偲ぶ

日加協会会長代行　山田　忠義

昨年十一月二十一日、近藤晋一日加協会会長が逝去された。この機会に、一言、故人を偲びたい。

故近藤氏

近藤会長は、昭和四十九年四月、故吉沢清次郎会長の引退に伴い、第四代日加協会会長に就任されて以来七年有余、協会のため、また日加両国間の友好親善推進のために実によく尽くされた。

近藤会長の長い外交官生活の中で、カナダとのかかわり合いは非常に深いものがあった。まず昭和二十九年十月から三十二年三月までの二年半、在カナダ日本大使館参事官として勤務され、次いで帰国後、外務省本省の情報文化局長として在任中（昭和三十二年―三十六年）、現在「新渡戸記念庭園」としてバンクーバーの名所の一つとなっている本格的な日本庭園造築に関し日加協会が参画した際、陰に陽に御尽力された。第三には昭和四十四年七月から四十七年八月までの三年余、駐カナダ大使として再びオタワに赴任し、活躍された。そして最後は、昭和四十七年十二月退官後、日加協会に関係し、前記のように四十九年より吉沢氏の後をついで、日加協会会長として御努力下さった訳である。

近藤会長は「真摯」と云う表現が一番ふさわしい人柄で、日加協会会長としての七年余も、協会の活動を活発にし、かつその発展のためにいろいろ心をくだき、ひいては日加間の融和ならびに相互理解の増進に役立つよう、多忙な時間を割いて熱心に取り組んでこられた。その上、病気入院中はもちろん、亡くなる直前まで、会務ならびに会の発展のために種々思いを致しておられた。文字通り、日加親善と友好の「柱」となられた得難い人物であった。これらのことを顧み、我々はその御遺志をついで今後一層協会の発達のために努力し、故近藤会長の長年にわたる御尽力に報いたいと考えている次第である。